

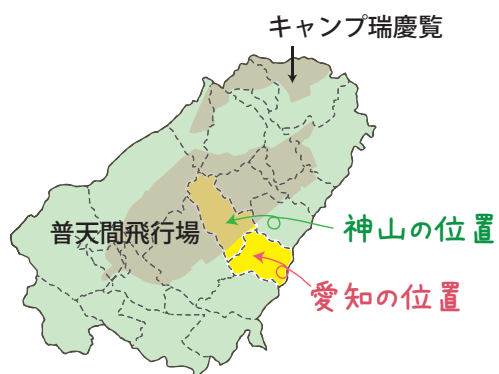
戦後の神山・愛知

沖縄戦により米軍の捕虜となった人々は、県内数カ所にあった民間人収容所から野嵩の民間人収容所へと集められ、戦後も元の居住地には戻れず収容所での生活が続きました。

1947(昭和22)年2月28日、愛知への移動許可が下りました。愛知は米軍に土地を接收されることはありませんでしたが、集落の中央を軍道5号線(現在の国道330号)が貫き、建設の際に家屋や土地を奪われた住民もいました。それでも1948(昭和23)年には全ての愛知県民が自分の土地に戻りました。

神山へは1947(昭和22)年11月に移動許可が下りましたが、愛知と接するごく一部の土地を除き、集落のほぼ全域を普天間飛行場として米軍に接收されていたため戻る場所がなく、1948(昭和23)年2月にカンミンモー(神嶺毛) ムーティンモー クン ダマシーバル をはさんで無手原や愛知の懇良増原などの耕地に宅地を造成して新しい神山集落を築きました。戦後77年が過ぎた今も元の集落に戻る事はできていません。

宜野湾市全域図



編集・発行/宜野湾市教育委員会
〒901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩1-1-2
TEL 098 - 893 - 4430

編集協力/株式会社文化財サービス
〒901-2222 沖縄県宜野湾市喜友名1-11-15-206

印刷/●●●●●●●●
〒〇〇〇-〇〇〇〇 沖縄県〇〇〇〇〇〇〇

愛知区のエイサー

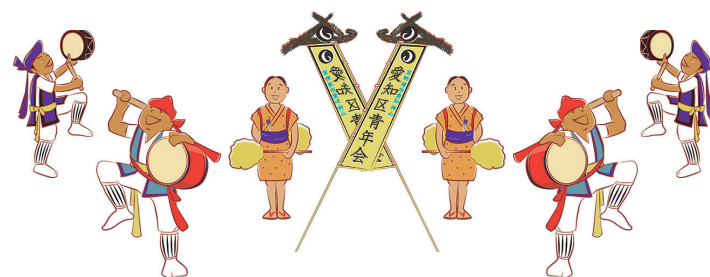


字神山で最初にエイサーが踊られたのは1901(明治34)年から1903(明治36)年頃です。神山エイサーは随所に空手の型を取り入れた勇壮な踊りで、女性は参加しませんでした。演目は「仲順流り」「久高」「花ぬ風車」「テンヨー」の4曲で、大太鼓・締太鼓・手踊りで構成されていました。衣装は特に決まりはなくバサー(芭蕉)などの着物でした。1940年代に入ると徴兵される青年が多くなり、踊り手が少なくなったことで女性も参加するようになりました。

愛知でエイサーが踊られたのは1919(大正8)年からです。千原エイサー(現嘉手納町)を参考にして、愛知独自のエイサーが作られました。演目は「仲順流り」「久高」「サフエン節」の3曲で、大太鼓、締太鼓、男女の手踊りで構成されていました。曲によっては扇子が使われ、曲中でも節ごとに振り付けが異なっていました。

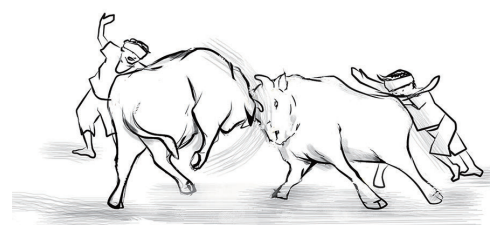
1964(昭和39)年に十九区となり2年後の青年会発足時からエイサーが行われました。当時すでに神山と愛知のエイサーは途絶えていたため、それぞれの先輩方から聞き習い、不明なところは青年会で補いました。神山エイサーの4曲と愛知エイサーの3曲が再現され、同じ演目もありましたが、曲調や高く上げる足が違うという特徴があるので、本番では神山エイサー由来の型を踊る時は「右のエイサーを踊ります」愛知エイサー由来の型を踊る時は「左のエイサーを踊ります」とアナウンスしたそうです。

2012(平成24)年からは愛知県青年会が二つの型を受け継いだエイサーを続けています。



愛知区 歴史文化遺産マップ

あいち



愛知区について

愛知区は隣り合う神山と愛知が1964(昭和39)年に統合した地域です。宜野湾市の中央部、普天間飛行場の東側に位置する閑静な住宅街で、中央を通る国道330号の沿道には店舗や病院・小学校・市民公園などが並びます。

戦前までは神山・愛知ともにサトウキビ栽培を主とする農村地帯で、1ヶ所のサターヤーで1日に生産する黒糖は250kgにもなったそうです。また、両地域で闘牛が盛んに行われていました。

神山について

1649年の地図にその名が見える神山は宜野湾市の中央に位置し、ジーン ナン マチ 宜野湾並松に沿って形成された集落で、西側から北側にかけて平坦で広い農耕地が広がっていました。沖縄戦中にはほぼ全ての土地を米軍に接收され、現在地への移動を余儀なくされました。

愛知について

1780年代以降、神山村の東側に広がる赤土の荒れた耕作地に中城間切や北谷間切、那覇からの移住者が屋取集落を築きました。1939(昭和14)年に字宜野湾と字神山の小字が分離独立し、行政区の愛知が誕生しました。



戦前の神山、愛知集落イメージ図